

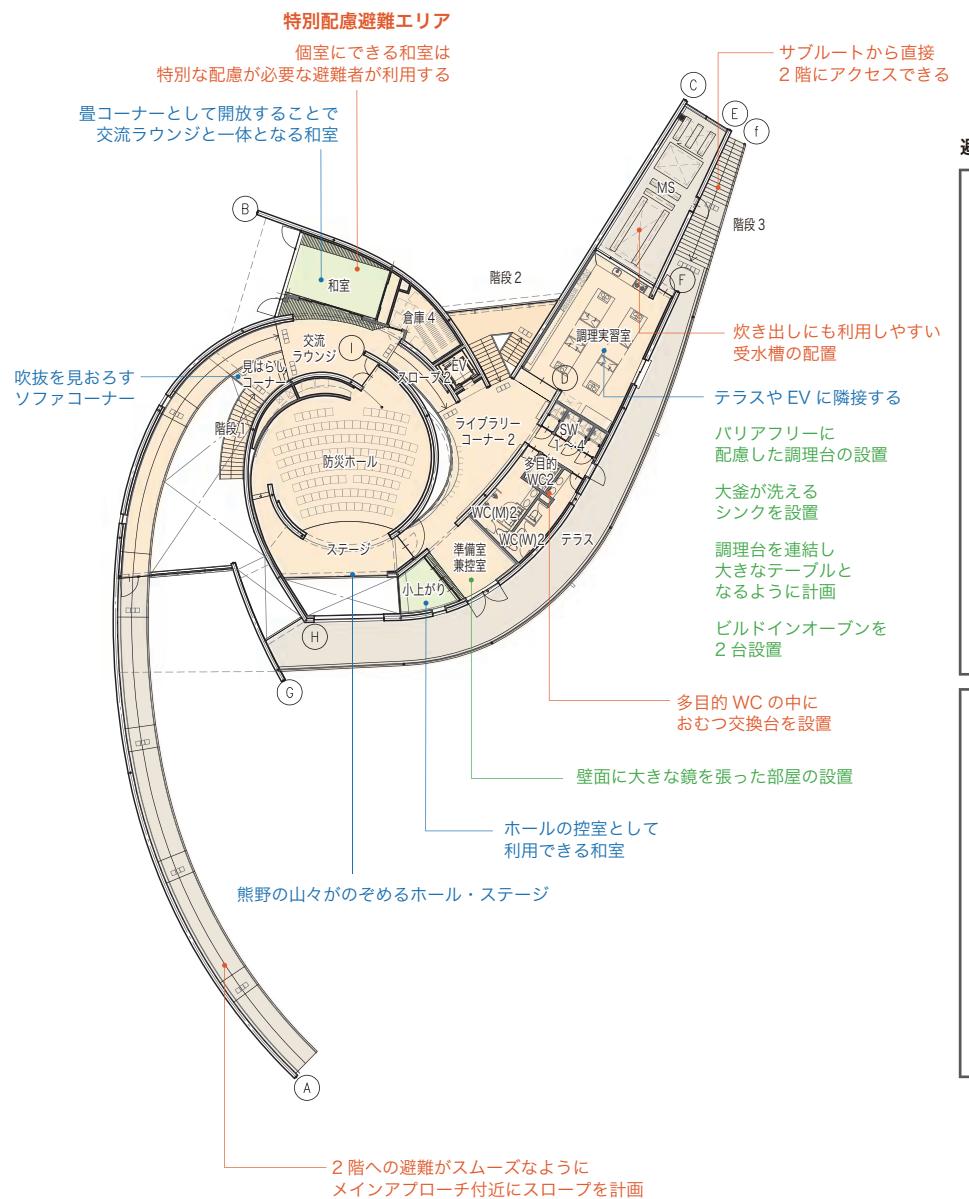
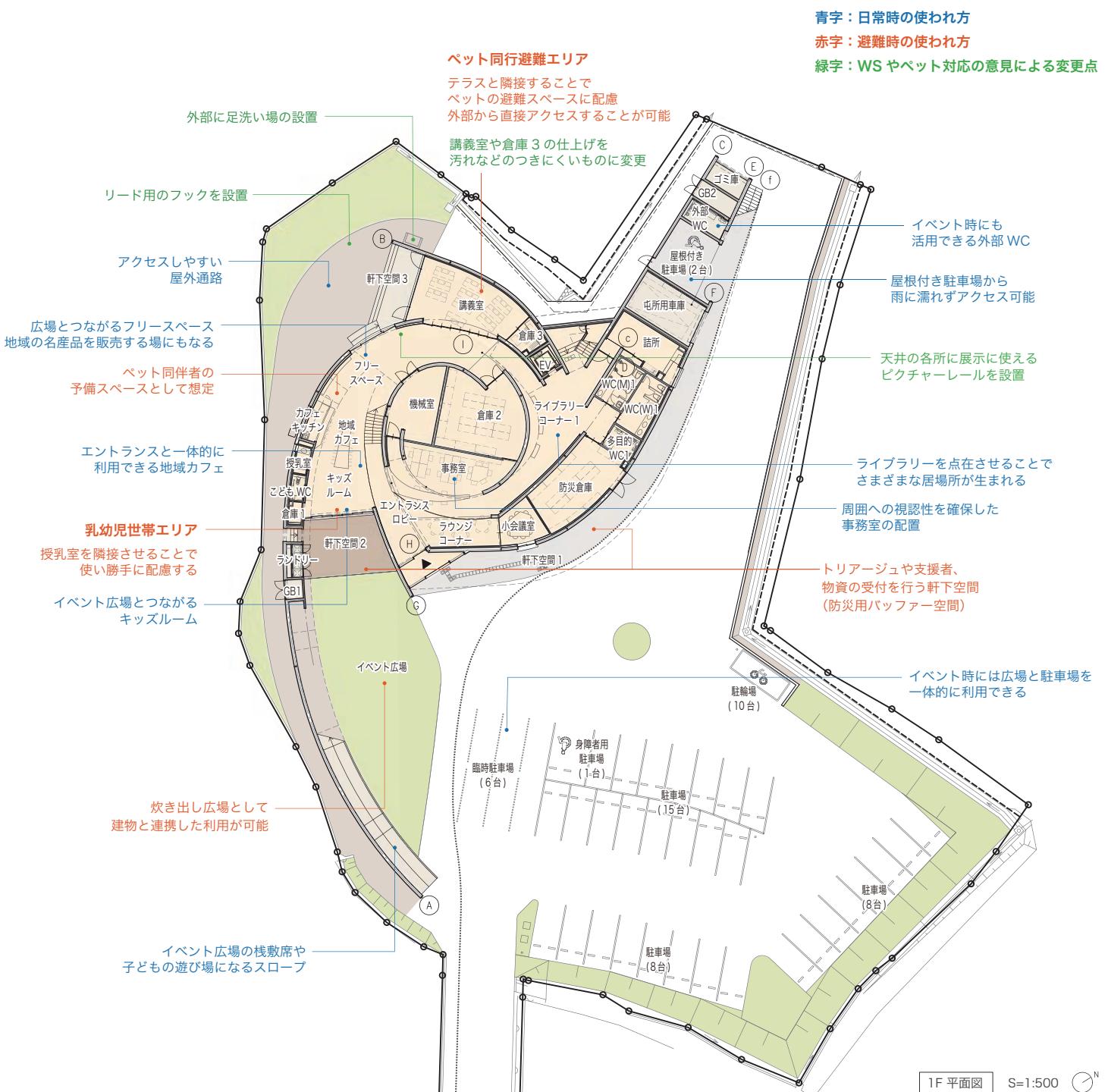
3. 2. 3 最終案

新しい防災センターの姿を目指して - 実施設計案 -

実施設計においては、基本設計の形態がよりシンプルに、明快に示されるように屋根や壁の配置が整理されました。壁のカーブや高さ、開口部の位置などが最適となるよう、大きな模型を作りながら繰り返し検討すると同時に、各室の利用方法にあった仕上げの納め方や、曲面を柔らかく照らす間接照明の考え方、家具、階段の詳細等が検討されました。空調や防災設備、構造、ホールの音響等も専門家を交えて詳しく検討が進められました。

プロポーザルからヒアリングやワークショップなどを重ね、少しづつ調整してきた建築が、パースのように実施設計案として固まりました。





避難時の収容可能人数	
A. 指定緊急避難所：災害発生後 3 日目頃まで	
エントランスロビー	24 人 (39.65 m ²)
フリースペース	43 人 (71.23 m ²)
ラウンジコーナー	12 人 (20.30 m ²)
小会議室	8 人 (13.73 m ²)
地域カフェ・キッズルーム	27 人 (45.41 m ²)
詫所	16 人 (27.18 m ²)
講義室	30 人 (49.63 m ²)
ライブラリーコーナー 1	52 人 (85.66 m ²)
交流ラウンジ・見晴らしコーナー	20 人 (34.17 m ²)
防災ホール・ステージ	82 人 (135.55 m ²)
和室	21 人 (35.52 m ²)
小上がり	7 人 (12.71 m ²)
準備室 兼 控室	11 人 (18.26 m ²)
ライブラリーコーナー 2	31 人 (50.89 m ²)
半屋外スペース	123 人 (203.12 m ²)
収容可能人数 (1,2F 合計)	507 人
※1人当たりの必要面積: 1.65 m ² / 人	
B. 指定避難所：災害発生後 3 日目以降	
フリースペース	21 人 (71.23 m ²)
講義室	15 人 (49.63 m ²)
地域カフェ・キッズルーム	13 人 (45.41 m ²)
ライブラリーコーナー 1	26 人 (85.66 m ²)
交流ラウンジ・見晴らしコーナー	10 人 (34.17 m ²)
防災ホール・ステージ	41 人 (135.55 m ²)
和室	11 人 (35.52 m ²)
小上がり	4 人 (12.71 m ²)
準備室 兼 控室	5 人 (18.26 m ²)
ライブラリーコーナー 2	15 人 (50.89 m ²)
収容可能人数 (1,2F 合計)	161 人
※1人当たりの必要面積: 3.30 m ² / 人	

アイディアを活かした場所づくり

熊野の皆さんとのワークショップで頂いた意見や、専門家の方々へのヒアリングでのアイディアを生かしていくながら、それぞれの場のあり方をプラスアップしていました。

公民館を実際に使っているお母さん方の意見を生かした調理実習室の特別な作業台や、1階と2階に広がっている分散型のライブラリーコーナー、災害時にペット同伴で避難しても匂いや汚れが気になりづらく独立した屋外のアクセスや水飲み場が準備されているペット同行避難エリアなど、プロポーザル案の時にはなかった様々な場所が生まれ、実施設計案としてまとめられました。

実際に利用される方々の顔や声を感じられたことで、そのほかの場所についても想像が膨らみ、提案に反映されていました。

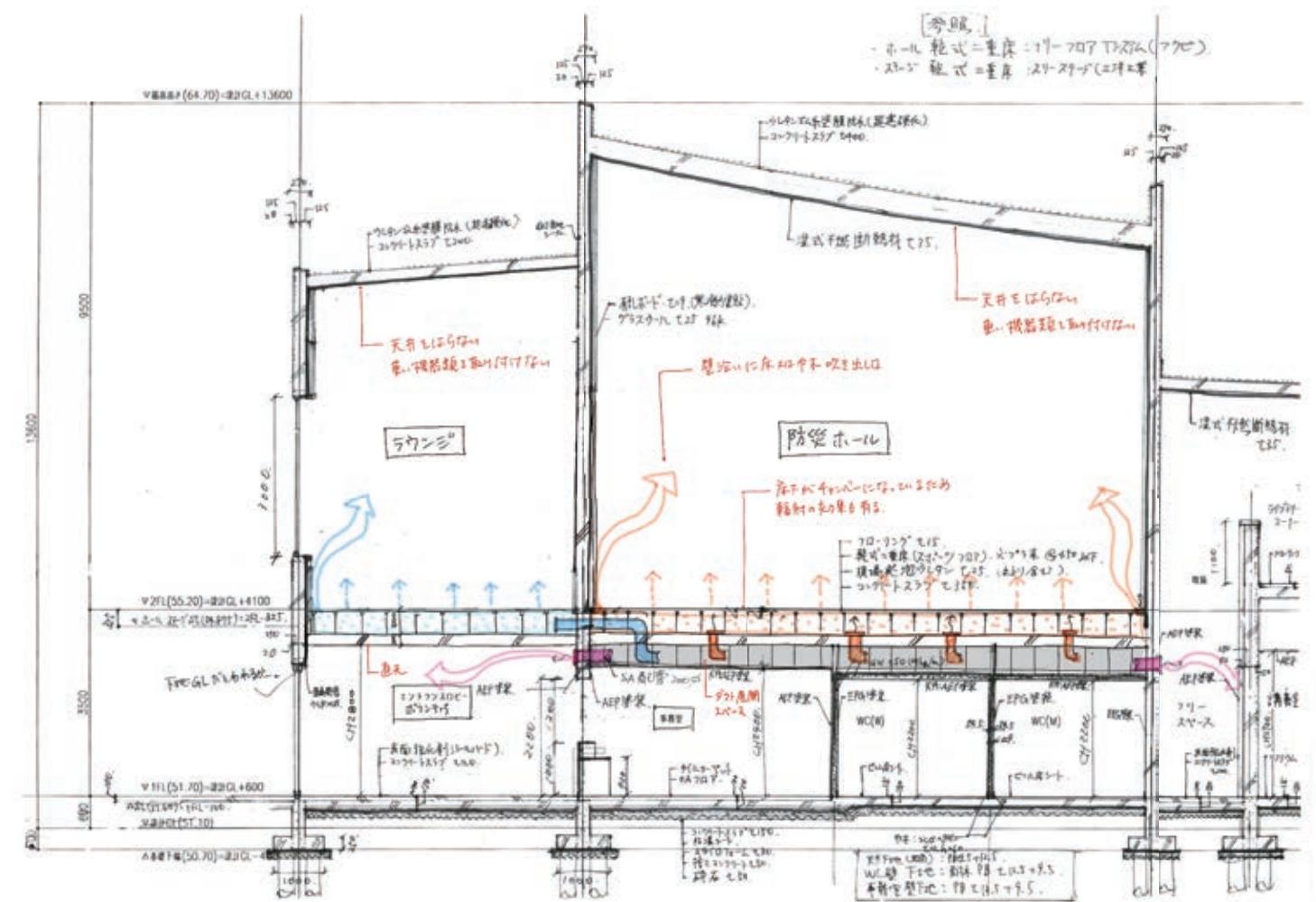




町の風景が入りこむ防災ホールのイメージバース



子どもから大人まで様々な人たちの居場所となる地域カフェのイメージバース



壁面を使った照明計画と2階床を使った空調計画の検討スケッチ

日常時でも災害時でも中心となる建物

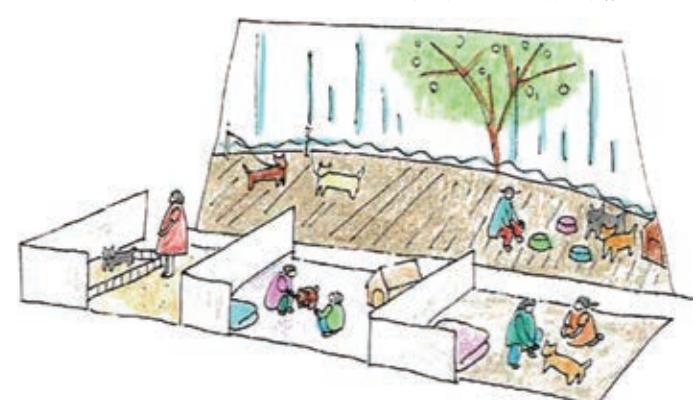
基本設計案のコンセプトをもとにしながら、2階へスムーズに避難のできるスロープやテラスはイベント時の桟敷席として使われたり日常における子どもたちの遊び場にもなったり、また避難時の特別な個室にできる各室は普段はそれぞれ異なる活動のしやすい場所にもなったりなど、災害が起きた時はもちろん、日常的に訪れても過ごしやすい空間となるように、壁や開口部の位置、そして仕上げなどの調整がされていきました。

また町の風景や光が入りこみ、避難をする時にも分かりやすい、象徴的な防災ホールが空間の中心となっている構成を生かしながら、さまざまな詳細部の検討が進められました。

設備を置くためのスペースとして2階の床下を使うことで浸水の被害を受けにくくする十分な対策をするとともに、フリースペースや防災ホールなどといった多くの人たちが利用する場所では天井の仕上材を貼らず、さらに重い空調や照明といった設備機器も取り付けずに地震が起きた時にも備えることで、より安心して利用ができる町の拠点となるように配慮して計画されました。



避難動線としてはもちろん、子どもたちの遊び場や防災ホールへの搬入動線にもなるスロープ



災害時は軒下空間を活用することでペットの居場所に